

「遊び」という視座から見た家政について
東北女子大家政 佐々木 隆

目的 衣・食・住という各分野を遊びという視座から統一的に理解する試み、これによって家政というものの持つ魅力をより掘げる。

方法論的反省 家政学は生活の科学と呼ばれているのだが、その内容の統一的な把握が困難であり衣・食・住がそれぞれどのように共通するのかが問われず、ただ生活への必要性の目的でまとめられているように思われる。科学の分科化は科学自体の運命ではあるが、しかし、生きている人間にとってそこに何らかの共通性を見いださなければ生活とは何かということすら認識できなくなるのではないか。そこで衣・食・住の周辺をよく観察してみると、衣については体の保護や保温の必要だけでなく、衣装を楽しみ飾ることが行なわれている。さらに食については飢えを満すだけでなく味覚や宴を楽しむ。衣と食を包括する場としての住については動物の棲家としての機能を越えた工夫が凝らされている。

それゆえに家政学には作る楽しさと、享受する楽しさの両面を含む「遊び」ということが共通に含まれているように思われる。確かに家政学は真面目な科学であるが、科学の秘見や発明において、これを混ぜたらどうなるか、これを結び付ければ何ができるだろうと考えるところの interesting 興味・面白さと遊び心のようなものが存在している。科学技術の先端にあるコンピューターにも遊びの側面があることにより注目すべきである。しかし、遊びという言葉の持つ多義性には良い意味ばかりではなく、悪い意味も含まれている。従来のも真面目さに加えて、良き遊びの側面が家政学に意識化されることは必要である。

結論 我々家政学に従事する者は遊びという視座を取り入れることが必要である。